

連載

追う

地域発

語る

問う

論説 特報

最善へ子の思い尊重



離婚後に暮らしていた母が、小学5年の時に再婚。母と再婚相手の間に子どもができて、疎外感を感じ、さみしかった。母が嫌な顔をすると感じ取って、父と連絡を取るのをやめた。新しい家で居場所がなくなると思ったから。でも、思いは消えない。父に会いたかった。「お父さん

川崎市麻生区の子大生(19) 離婚時は8歳
父と毎月母とは年に2-3回会う 一人暮らし

今も親権は母。ずっと私を育ててくれた母「何で今更」とも言わず私を受け入れてくれた父。どちらにも、本当に感謝している。今はまだ学生でリアルではないけれど、家族というものは人一倍、憧れもコンプレックスもある。

「好きだから、選べない」

親と子どもは意見が違ふ。だから、子どもの気持ちを分かった気にならないでほしい。「べつちが好き」「べつちと暮らしたい?」離婚前に両親のけんかが増え、双方から別々に聞かれた。父に聞かれたら「パパ。母なら「ママ」。父も母も大好きだから、本当は選べない。相手の悪口をそれぞれから聞いていたから、その気持ちを言えなかった。家庭内で八方美人になっていた。

離婚後に暮らしていた母が、小学5年の時に再婚。母と再婚相手の間に子どもができて、疎外感を感じ、さみしかった。母が嫌な顔をすると感じ取って、父と連絡を取るのをやめた。新しい家で居場所がなくなると思ったから。でも、思いは消えない。父に会いたかった。「お父さん

離婚後に暮らしていた母が、小学5年の時に再婚。母と再婚相手の間に子どもができて、疎外感を感じ、さみしかった。母が嫌な顔をすると感じ取って、父と連絡を取るのをやめた。新しい家で居場所がなくなると思ったから。でも、思いは消えない。父に会いたかった。「お父さん

離婚後の親子関係(上)

離婚が珍しくない現在、対立する両親の間で子どもの意思は置き去りにされがちだ。「一人の人間として尊重し、思いに耳を傾けてほしい」「子どもが自分で考え、選択できることが大切」。6月末、千葉市内でシンポジウムが開かれ、両親が離婚した8人がそれぞれの経験を振り返った。いかに子どもの意思をくみ取り、最善を実現するか。シンポジウムでの言葉を中心に、親子や家族のありようを見つめてきた子どもたちから大人、社会へのメッセージを伝える。

(構成・竹内 瑠梨)

支援充実 社会の責任

対立する両親の間にいる子どもも声をもち発信したい。主催したNPO法人ウィーズ(千葉県船橋市)が、シンポジウムに込めた思いだ。離婚や別居で離れて暮らす親子が会う面会交流を支援。光本歩副理事長(28)は「子どもの思いを聞き、くみ取らなければ、子どもにとっての最善を考えることはできない」と訴える。

して考慮しなければならぬ」と明文化。家庭裁判所も調停中の夫婦に積極的に勧める。早稲田大の棚村政行教授(家族法)は「共働き夫婦が一般化し、父親の子育てへの意識や子どもへの関心が変化してきたことも一因」と分析する。

光本さん自身、13歳の時に両親が離婚し、父子家庭で育った。親を気遣って本音を言えないこと、成長に応じて家族観や自身が望む両親との関係が変わることなど、子ども目線の考えがあることを体験で知る。だからこそ「長い目で見て、その子のために何が一番良いのかと考え続ける」と支援現場で奔走する。面会交流を巡る調停件数は全国的に増加している。司法統計によると、2015年は約1万2千件で、10年前の約2.4倍に上る。

一方、合意は義務付けられておらず、夫婦間の対立などで親子が全く会えないケースは後を絶たない。行政の取り組みは乏しく、ウィーズのような民間の支援団体が仲介を一手に担っているのが実情だ。

棚村教授は夫婦間の争いが起きやすい単独親権、面会や養育費などの合意なしに離婚できる制度、一本化された相談窓口が身近にない点などを挙げ、「子どもの権利を正面に据えた社会の仕組みになっていない」と問題視。「家庭の問題は家庭で解決するという旧態依然の考えではいけない。子どもの声をくみ取り、必要な支援体制を整備し、運用することは社会の責任」と強調する。

なぜ増加しているのか。背景の一つは12年施行の民法改正だ。離婚する際、面会交流の取り決めは「子の利益を最も優先

「思い聞いてほしかった」

「子どものため」。父はよくそう言っていた。でも子どもは幸せのために何が出来るのか、まずは子どもの思いを聞いてから考えてほしかった。家族4人。小学生の時旅先によく出掛け、常に笑いが絶えなかった。中学に入ると両親の関係が悪化し、高校2年の時に母の不倫に気付いた。

父を傷つけると思い、何も言えなかった。中学一年から

川崎市麻生区の子大生(23) 離婚時は21歳
父と時々会う 母とは会っていない 一人暮らし



子どもの思いを聞いていないのに、子どものための選択ができると思えない。離婚から10年ほど経たないが、子どもとして、とうとう一人の人間として、それぞれが幸せになれる道を考えて、もっと早く決めたかった。

続けていたバスケットボールは、身が入らなくなりやめた。退部。家出。母とのけんか。何かメッセージを飛ばしようと必死だったと思う。「子どものために(母のこととは)許そうと思う」。父に言われた。本当は自分が一緒にいたいならば、そう言えは良いのに。離婚は世間体が良くないとも言う。子どものため、と言いつつ、結局は自分を守ろうとしていると思えた。

母は子どもを自分の支配下に置きたがる人。嫌いではないけれど、私は自分自身で生き方を見つけた。母と離れることが、自分の幸せにつながると今も思っている。「もう会わない」。大学4年の時母にメールを送った。「会いたい」と連絡は来る。でも会わない。会いたいと思つた時、自分から会いに行くことと決めているから。

今は大学院で臨床心理学を学び、家庭裁判所の調査官を目指す。不登校や家庭のことで悩む若者の学習支援、面会交流支援などの経験も重ねる。

「論説・特報」へのご意見、感想をお寄せください

ファクス=045(227)0153=か電子メール=houdo@kanagawa-np.co.jp=で神奈川新聞報道部まで。

論説 特報

問う | 語る | 地域発 | 追う | 連載

離婚後の親子関係(下)

両親が離婚した子どもの思いや境遇は千差万別だ。千葉市内で開かれたシンポジウムでは、親や大人の愛情がどれほど伝わったかで、子どもの抱く家族観や親との関係性に影響することが浮き彫りになった。いかに子どもの意思を尊重しながら、向き合っていくか。子どもたちが語った思いは、大人や社会に重要な課題を投げ掛けている。

(構成・竹内 瑠璃)

子どもの声聞き続ける



母と祖母の抵抗感も強く、面会は時中断した。それでも光本さんは女の子と会い続けた。時間をどう使うかで、気持ちを知りたかったからだ。

光本さんは振り返る。「お父さんとお母さんは普通に話せるんだ。子どもがそう察知したんだと思う。子どもは親のことをしっかりと見ています」。もちろん、会話ではできない。月に1度、わずか1時間程度の親子の時間が子どもの復讐を見守り続けることにもなる。優しく抱きかかえ、ゆつりと繰り返す揺らしで安眠を促すだけ。それでも大きな意味があると、光本さんは考える。

「親が関わってくれていいな」といふ子どもは多い。法も本音をつかめない親は多い。光本さんが支援するが、それだけでは限界がある。光本さんが大切にしているのは、子どもの意思をくみ取るための「かけ集め」だ。

「なせ親の離婚に対する子どもの思いを聞く必要があるのか」。光本さんが親たちから何度も投げ掛けられる質問だ。「子どもの気持ちやええところになる」「思いを聞けば、子どもが責任を感じてしまふ」。そんな言葉も耳にする。

だが、光本さんは言い切らない。「子どもを一人の人間として尊重すれば、その思

「お父さんに会いに行つてみる」。離婚や別居で離れて暮らす親子が会う面会交流。支援団体・NPO法人ウィーズ(千葉県船橋市)の光本歩副理事長(28)が女の子(4)に問い掛けると、傍らの母親の顔を伺いながら答えた。「行つてみる」。その一言に、「一緒にいた祖母が涙を流した。母と祖母は、離れて暮らす父と女の子との面会を快く思っていない。祖母の涙を前に、女児は複雑な表情を浮かべた。

面会交流では、対立する両親が子どもの思いを尊重できるよう民間団体が支援するケースは少なくない。ウィーズは2011年から、53組の親子と関わる。父との再会は半年ぶり。初めての面会実現までには1年がかかった。ようやく迎えた親子の時間は、ファミリーレストランでの塗り絵。いろいろな色がある色鉛筆、あげると、娘のためだに用意した40色ほどの色鉛筆を父が差し出す。でも、女の子は使わない。「ママとおばあちゃんに塗られるから」

NPO法人ウィーズ 光本 歩副理事長

「なせ親の離婚に対する子どもの思いを聞く必要があるのか」。光本さんが親たちから何度も投げ掛けられる質問だ。「子どもの気持ちやええところになる」「思いを聞けば、子どもが責任を感じてしまふ」。そんな言葉も耳にする。

だが、光本さんは言い切らない。「子どもを一人の人間として尊重すれば、その思

「なせ親の離婚に対する子どもの思いを聞く必要があるのか」。光本さんが親たちから何度も投げ掛けられる質問だ。「子どもの気持ちやええところになる」「思いを聞けば、子どもが責任を感じてしまふ」。そんな言葉も耳にする。

だが、光本さんは言い切らない。「子どもを一人の人間として尊重すれば、その思

だが、光本さんは言い切らない。「子どもを一人の人間として尊重すれば、その思

母の言葉、生活の芯に
東京市の女性社会員(36)
離婚時は16歳
父は毎年10回面会(年10回)それ以外会う

4人姉妹の長女。父からの養育費はなかったが、「会いたい」と言ってきたらうれしかった。母は女手一つで子どもを育て、大卒まで行かせてくれた。「お金は何とかなる。誰にだって選択肢はある」。家庭を持った今、いつも掛けてくれた母の言葉が私の生活の芯になっている。

社会人となって両親を一人の間として見られるようになった。子ども4人を母1人で育てるのは大変だっただろう。母にも相談できる第三者がいれば良かったのと思う。

大人は子どもを理解して

千葉県的女性社会員(28)
離婚時は10歳
父は時々会う、母は同居

私は両親から、いつもちゃんと愛されているという安心感をももらっていた。父は離婚後も「離れていてもお父さんの子どもなのは変わらないよ」と伝えてくれた。母は1度だけ父に会わないで伝えてきたが、「会いたいなら私は止めないよ」とも言ってくれた。親が両方いると片方だけだとかたはな、過剰にやさしい家族でいることが一番大事。

思いに重点置き面会を

東京市の男性社会員(28)
離婚時は10歳
父は毎月1回、母は10回会う

父と一緒に遊び、楽しくて好きだった。でも、離れて暮らす中、成長するにつれて部活動や興味の異なるものが増え、父への関心は薄れていった。だから今は、それぞれ的人生を生きているという感覚。

母と約束をしていたのに父は養育費を支払っていなかった。一人の大人として無責任だと思う。父と面会交流をしているが、親子がお互いに会いたい時に会うのが良い。義務感ではなく、会いたいという気持ちで会っていたら親子の関係性が薄れることはない。その思いに重点を置いてほしい。

東京市の女性社会員(26)
離婚時は10歳
父は10年以上会っていない

父は毎月1回、母は10回会う

母と約束をしていたのに父は養育費を支払っていなかった。一人の大人として無責任だと思う。父と面会交流をしているが、親子がお互いに会いたい時に会うのが良い。義務感ではなく、会いたいという気持ちで会っていたら親子の関係性が薄れることはない。その思いに重点を置いてほしい。